

## 「皇居東御苑・北の丸公園探訪」

2023-10-28 記 猪木誠二

■実施日 2023-10-19 (木) 10:00~12:20 ■参加者 20名

■集合 所沢駅池袋線乗りホーム

■場所 平将門首塚、皇居東御苑、北の丸公園

大河ドラマ「どうする家康」も終盤に差しかかりました。この機会に、江戸城の遺構、皇居東御苑、北の丸公園などの見学を企画しました。大手町駅からスタートし、平将門首塚、東御苑、北の丸公園を経て九段下駅をゴールとしました。

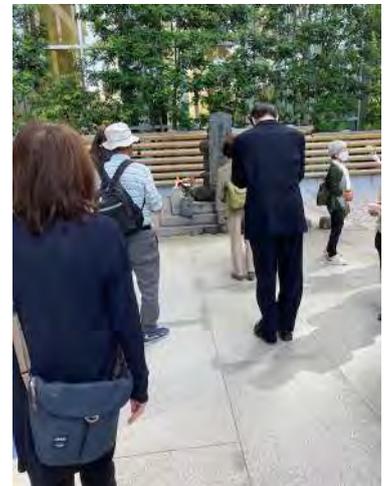
■行程 大手町駅⇒平将門首塚⇒大手門⇒百人番所⇒二の丸庭園⇒本丸休憩所⇒天守閣模型⇒富士見櫓⇒富士見多門⇒天守台⇒北桔梗門⇒北の丸公園⇒田安門⇒九段下駅

## ◆平将門の首塚

東京大手町。日本最大のオフィス街にある「平将門の首塚」は、東京随一のパワースポット。ビジネスマンの「守り神」として、平日の昼下がりにも訪れる人が絶えません。平安時代に関東をおさめた平将門は、勇猛な武将。時の朝廷に反逆し、平将門の乱を起こしました。しかし敗れ、京の都でさらし首に。その首が夜空に舞い上がり、落ちたのが首塚の場所だと伝えられています。700年前に建立された首塚は、関東大震災で倒壊。その後、大蔵省がそこに仮庁舎を建てましたが、省の職員、工事関係者、現職の大臣と不審な死が続き、仮庁舎を撤去。首塚は再建され、怖れと崇敬を集め続けています。



平将門の首塚



#### ◆皇居東御苑

皇居東御苑は、皇居造営の一環として、昭和35年1月29日の閣議決定に基づき、皇居東地区の旧江戸城本丸、二の丸及び三の丸の一部を皇居附属庭園として整備することとなり、昭和36年に着工し、昭和43年9月に完成したもので、面積約21万㎡の庭園です。昭和43年10月1日から宮中行事に支障のない限り一般に公開されています。多くの外国の方も興味深く参観されていました。

#### 二の丸地区

百人番所、復元された日本庭園（二の丸庭園）と、二の丸雑木林・新雑木林、都道府県の木、菖蒲田などがあります。ここより汐見坂を上って本丸に向かいます。



汐見坂

#### 本丸地区

天守台を望むように中央部には広々とした芝生が、そして、それを囲むように、バラ園、竹林、果樹古品種園、桜の島、野草の島、茶畑など場所ごとに特徴づけられた緑地帯があり、また、桃華楽堂、富士見櫓などの建造物があります。芝生の場所にはかつて大奥、中奥、本丸表の御殿が立ち並んでいました。

#### ●富士見櫓

「江戸城跡」南に位置する、高さ約16メートルの三重櫓。江戸城の史跡として唯一残る三重櫓として知られています。どこから見ても同じような形に見えることから「八方正面の櫓」という別名を持ち、明暦3年（1657）の大火で天守閣が焼失した後は、「代用天守」として重要な役割を果たしてきました。

#### ●富士見多聞

多聞とは、城郭の石垣上に建てられた長屋で、城壁よりも強固な防御施設でした。江戸時代の江戸城本丸には、このような多聞が、各所に築かれていましたが、現存するのは、この富士見多聞だけです。今は見られませんが、かつてはこの富士見多聞から実際に富士山を望むことができたと考えられます。

#### ●天守台

江戸城天守閣は、三度建てられました。明暦の大火で焼失した後は、天守台の石垣が築き直されただけで、再建されることはありませんでした。

#### ◆北の丸公園

江戸時代に江戸城北の丸があった場所で、公園の名称や町名はこのことに由来します。明治時代からは近衛師団の兵営地等として利用され多くの建物が建てられましたが、戦後になり皇居周辺の緑地として活用されることが決定され、森林公園として改



北の丸公園にて

修が進められました。旧皇室園地に由来する国民公園皇居外苑の一部に編入され、昭和44年(1969)に昭和天皇の還暦を記念して開園し、広く一般に公開されました。

北の丸公園は、戦後に多くの建物を取り壊し、新たに造営された芝生地や池、ヤマモミジ、ケヤキ、コナラ、クヌギ等のいわゆる里山の木々や野鳥が好む実のなる木、花木などが数多く植えられた落葉樹林、戦前から残る周縁部の常緑樹林などで構成されており、開園から間もなく50年となる長い時間を経て、ようやく皇居と一体となった森林公園としての景観や自然環境が形作られる時期を迎えつつある若い森です。千鳥ヶ淵などの皇居外苑を取り囲むお濠や、重要文化財に指定されている「旧江戸城田安門」、「清水門」などの史跡のほか、昭和館、東京国立近代美術館、工芸館、国立公文書館、科学技術館などの文化施設をめぐることができる「歴史と自然の森」として、多くの皆さんに親しまれています。(環境省Webサイトより)

## ■おわりに

今回は「どうする家康」で家康が江戸に入った頃と時を同じくしていたので、興味深いものだったと思います。現代の東京にどのようにつながっていったのかも想像が膨らみました。

(以下参考)

家康以前の江戸城について、本資料に追加(蛇足)したいと思います。

## 江戸城の位置

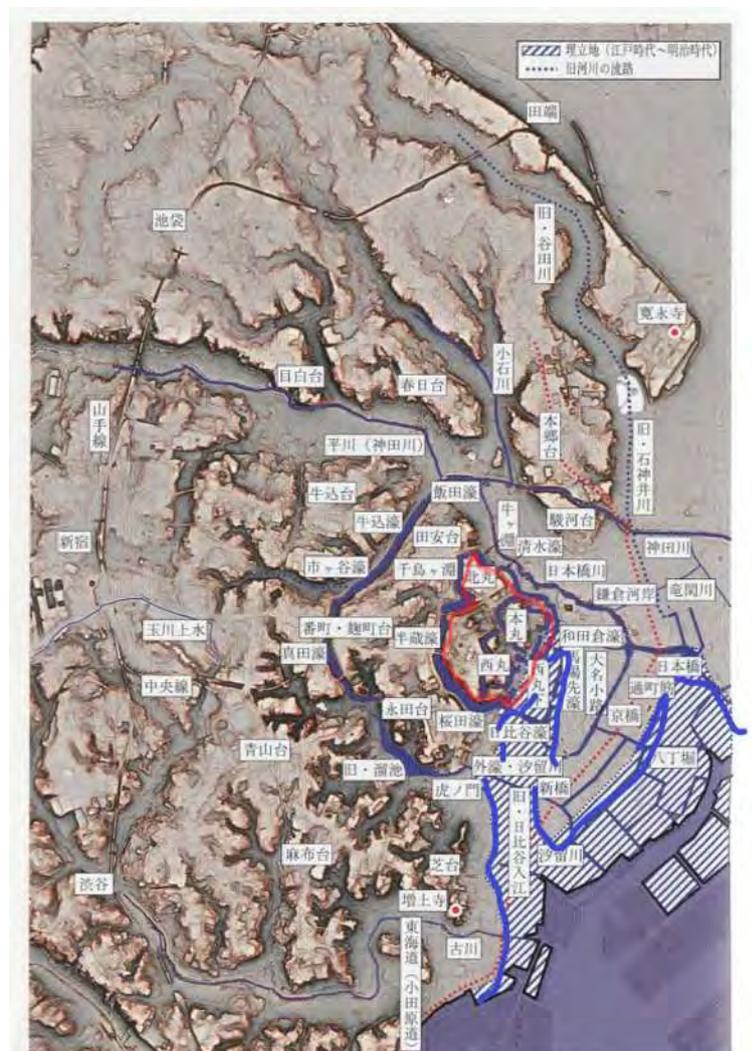
右図は江戸城(赤線囲み)を中心にして付近を描いた立体図ですが、これを見ると江戸城はちょうど武蔵野台地の端に位置しているのが分かります。

そして日比谷入江(青線囲み)が深く湾入し、江戸城直下まで海が迫っています。江戸城が築かれた当初は、すぐ南側が海であって、東側の平川(現:神田川)とともに守りを固めた要害の地であったことが分かります。(湾の南側は河川の沖積地が築いた岬:前島です)

このあたりは当時「江戸郷」呼ばれていて、その地名から後世も「江戸」と名付けられたものと思われます。

中世の江戸郷は、東西に連絡する幹線道路(房総・浅草・江戸城・府中・鎌倉・西国)と南北を連絡する幹線道路(川越・清戸・江戸城・鎌田)が交差する交通の要所でもありました。つまり中世の江戸城は陸上交通の要所であり、また日比谷入江を介しての海上交通の便にも恵まれた重要な地点だったのです。

私たちがイメージする江戸は、葦の生い茂る沼沢の地」だったわけですが、中世においては



口絵1 赤色立体地図で見る江戸城と市街(明治末期の濠、水路、海岸線など)  
資料:1) 赤色立体地図(口絵1、4ともに)(たましん地域文化財団提供、アジア航測・千葉達朗氏作成)に地名、水面等を加筆。当該の赤色立体地図は、たましん地域文化財団デジタルアーカイブで閲覧できる。<https://tre-adeac.treco.jp/WJ11E0/WJJS06/1392015100/139201510010020/h00020>。  
2) 濠、水路、海岸線等は、大日本帝国陸地測量部2万分の1地形図『東京首都』(明治42年測図、明治44年発行)及び『東京南部』(明治42年測図、大正4年発行)による(ただし、平川と古川は赤色立体地図による)。

必ずしもそうではなく、幹線道路が交差し、それなりに人々が居住していた里だったことが分かりました。

それではこの地に城を最初に築いたのは誰で、その城はどのように変遷していったのでしょうか。そのことを以下で大雑把に辿ってみたいと思います。

## 江戸城の変遷

平安時代末期、「江戸郷」の地に最初に居館を築いたのは、秩父平氏の一族、江戸重継とされています。秩父平氏は鎌倉幕府でも重用された氏族でした。

しかしその後の室町時代になって秩父平氏一族は分裂し、そのため江戸郷の居館も一時うち捨てられてしまいました。

その跡地を整備し、城郭を築いたのが太田道灌でした。太田道灌は、当時の関東管領、扇谷上杉家の家老でしたが、扇谷上杉家は川越城とこの江戸城を以て古河公方と対立していたので、その前線基地だった江戸城に道灌を配置せしめたものと思われています。

道灌が築いた城は、後の本丸付近（現：東御苑の一部）にあったと想定されています。外城、中城・子城と三つに分割され、前面に平川（現：神田川）の流れを引き込んだ堀に囲まれていたようです。

その後この地は、扇谷上杉家の領有を経て、小田原北条氏の領地となり、江戸城は北条氏の支城となりました。そのまま戦国時代中期となり、今度は秀吉が攻めてきて北条氏は滅亡し、いよいよ徳川家康が関八州を治めることとなったのです。

家康が江戸に入った頃は、江戸城も荒れ果てていましたが、家康は何より先に城下の整備を優先し、移封の2年後の文禄元年（1592）ようやく西ノ丸建設を始めました。城の拡張整備については、家康の時代は主に徳川家の財政により進められ、よく知られる天下普請（全国諸大名に整備を請け負わせる）は二代秀忠、三代家光時代からといわれています。

そのようにして江戸城は拡張整備され、現在の千代田区がほぼ含まれてしまうほどの壮大な規模で総曲輪が完成したのは、寛永13年（1636）と言われていています。豪華な本丸、天守閣、西の丸などが完成したわけです。

肝心の天守閣は、秀忠、家光と代替わりごとに作られましたが、四代家綱時代の明暦の大火（振袖火事：1657年）により、江戸城中に飛び火し、天守閣消失、二ノ丸も全焼してしまいました。西ノ丸だけがかろうじて助かったという有様です。この時以来、「ただ景観だけの建物である」（家綱の叔父、保科正之）とされ、天守は再建されませんでした。

右図は、宮内庁が復元した寛永期（家光）時代の天守閣模型で、確かな時代考証に基づき、1/30スケールで作成されたものです。深いグリーン屋根と黒い漆喰が印象的な天守ですね。（「宮部みゆき」著『ほのぼの平成お徒日記』を参考にしました）



担当 D グループ 安田好子、猪木誠二、粟屋貴夫